

小説

# 風の真珠

大宮 純

ガラス越しに、レストランコート内の様子が見えた。ピザの食べ放題を満喫した親子が、ゲップを仕合ながら笑いこけている。皿を返却棚へ戻した男性が、ポケットから煙草の箱を取り出してこっちの方に向かって歩き出した。

私は、人差し指を口元に当てて市川充子へ目配せした。「で、で……。おいらは、アーチャーに謝ってくれて頼んだんだよ。でも、悪かったって言うだけで、責任を取らないんだ。えつ。何？」

彼女が後ろを一寸振り向いた。

「油断しないほうがいいですよ。誰かが闇耳を立てているかもしれないんです」「う、うん」

男はドアを開けて私たちの居る風除室に入り、一寸視線を市川にやると、そのまま外へ出て行った。

後ろ姿を追った。デパート中庭の外壁に設えてあるベンチに座り、ジーパンのポケットからライターを取り出して火を灯し、煙草の先へ炎を近づけている。黒縁の眼鏡をつけている貌だ。時折、後ろを振り向くが、こっちの会話を盗み聴きしている様子はない。

煙草の煙が風に乗って、空中に漂っていく。先に目をやると、庭の桜が芽を大きく膨らませていた。庭の突き当りにある階段の向こう側には、乗用車が数珠なりになっている。入学・就職祝の品物を買ったために、客がやってきているのだ。

「続きを話してくれませんか。肝心なことだけでいいんですよ。汚辱に満ちたことは、必要になったらでいいからね」

彼女が上司からセクハラを受けときの状況は、第三者として聴くに耐えられないだろうと思った。

「お、おいらも、思い出したいくはないんだ。ただ、JCC工機の横暴を質したいんだ。派遣切りが許せないんだよー」

眼に涙を浮かべ、怒りを露わにしている。

彼女の説明によると、JCC工機は資本金が二十億円で、約千人の従業員を有している。自動車やフォークリフト及び産業機械用のエンジンなどの製造、各種エンジン用部品の機械加工と組み立てを行う会社だ。

「言いづらいいけど、貴女は闘う相手を、こっちゃん混ぜにしているんですよ」

「ど、どついうことだ……」

「そりゃ、JCC工機は、搾取でたっぷりと儲けていながら派遣労働者を解雇した罪は重い。新聞紙上でも騒がれているんですよ。でもね……」

と切り出して、加害者の元上司・青沢修一郎氏と、青沢を研修兼苦情処理担当職として雇用していたJCC工機、JCC工機へ市川充子を派遣していた人材派遣会社・微笑ほ

ほえみスタッフの三者を区別して、闘うしかないと教えてた。「んだ。んだ。お、おいらもそう考えているだよ」

頷いてはいるものの、半分も理解できないらしく眼をパチクリさせている。

「それからね、アーチャーって呼ぶのはおかしいですね」

被害者が、加害者のことを愛称で呼んだら、話にならないでしょ」「きつく叱った。

「だ、だって、ずっとそう呼ぶように強いられてきたんだ」

恥ずかしそうに顔を赤らめると、大柄な身体をいやいやでもしているかのように振っている。

「だったからと言って、いまもニックネームで呼ぶ義理はないでしょ。あほらしくて聞いていられませんね」

（こんなことをしても無駄かもしれないな。本人のためにならないのではないが。ほどほどに付き合うしかない）

と、空しさを感じると同時に空腹を覚えた。買い物袋からバナナを取り出して、

「一つ如何ですか」

「い、いえ。おいらは苦手です。河島先生が食べてくだ

さい」

手を顔の前で大きく振っている。

「止めてくれませんか。絵画教室で助手をしていた程度で、貴女から先生って呼ばれるのは嫌ですね。絵の腕前だって、見てご存じのように下手です」

彼女は、私が道楽でやっている西塔画廊のモデルを勤めていた。

「で、さっき仰った肝心なことって、いったい何ですかね。おいらは、期限が来たから解雇されたけれども」

教えて欲しいという目つきだ。

「それはね。青沢が貴女に何と言って性行為を強いたかってことですよ」

何か、理由があるはずだ。二十三歳も年上の男が若い女性に対して性行為を強いるには、それなりのプロセスがあるだろうと思った。

「そんなごとは、思い出しても反吐が出るじゃ」

なあんだ、そんなことかという態度だ、

「具合が悪くなるのは分かります。でも、相手の要求に従わないと、首になるかも知れないと思っただ訳があるでしょ」

……私は帰ります」

バナナの皮をビニール袋へ仕舞い、鞆を肩にかけて席を

立った。

「は、ははーっ」

彼女は、眼を白黒させながら毛糸の帽子を被りナツプザックを手に取った。

「思い出したら連絡してくれませんか。星空介護ホームの仕事も頑張ってください」

彼女は、ＪＣ工機で働いている間に取ったヘルパーの資格を活かして、介護施設の職を見つけたのだ。

「は、はい。明日日から本番です」

二人で駐輪場へ出て別れた。

市川は、大きな身体を左右に揺らしながら、自転車に乗って春めいてきた街の坂を下って行った。

（星空介護ホームで、へまなどをしなければいいが。少しおつちよこちよいらしいし……）

そんな風に考えた。

金融危機（リーマンショック）を発端とする世界的不況のもとで、日本国内の自動車産業や家電メーカーなどを中心とする製造業は、七十万人から百万人という大規模な労働者の派遣切りを行った。ＪＣ自動車と、その関連企業だけでも、その数は約一万人と言われている。ＪＣグループ

は、約四兆円もの内部留保を有していたが、この危機を千載一遇のチャンスとしてとらえ、経営再建の名のもとに徹底した合理化を進め、派遣切りとともに常用労働者の非正規化を図って巨大な資産を形成した。市川充子は、こうした資本主義社会特有の矛盾と、日本独特の労働法制の渦の中に巻き込まれ、物のように使い捨てられたのだ。

マナーモードにしている携帯電話が、ジャンパーの内ポケットで振動した。

液晶画面を見ると、市川からのものだ。

（勤務時間の筈だが、何か急ぎの用でもあったのかな）

と、胸騒ぎを覚えながら受話器の標示ボタンを押した。

「先生。おいらは、もう諦めました。星空の仕事も没になりまして、いま家に戻る途中です。うへへへ」

半分、泣きべそを掻いている声だ。

「なんだって……。没ってどついうことですか。まさか解雇されたんじゃないでしょうね」

「どうせ、始めから嫌だったんですよ。だって、ホステスのようなことをやらせられて、平気で居られますか。帰れって言われたがらさー」

ホステスというのは、星空介護ホームの開業パーティが

催された際に、彼女が所長の命令で参加者へ酒を注ぐ役をさせられたことを指している。

「何の理由だったんですか」

結論ばかりを聞いても訳が分からない。

「さーね。でもハイって従うしかながんべ。うへへへ。おいらなんか、どこでも必要ないんだじゃ」

やけくそになっている。

「間抜けですね。いま直ぐにこつちに来なさい。ちょうど、ホットライン魚町の本屋に居るから、一時間ぐらいは打ち合わせする時間があります」

世話のやける若者だと呆れた。

「は、ははーっ。おつかねーな。ぴゃっこ待ってて下さい」

半刻後、自転車ですつ飛んできた市川を喫茶店「ブルー・シャトー」に誘い、二階の奥まった席で今後の作戦を練った。彼女は、ふてくされた態度で話を聞いていたが、途中から見違えるように元気を取り戻して、

「んじゃ、やってみますだ。へへへっ、こいつは面白くなってきます。先生の教え通りに、まず、明日は黙って出勤します」

「話を伺っている限りでは、星空介護ホームは、労働基準

法で定められた解雇の要件を逸脱したようですから、問題なんですよ」

金を取るためにだけやるのではないと、暗に論じた。「うんだ。よ、要件がすね」

「遊びでやるんじゃないからね。今後は、組織に相談してはどうですか」

労働組合の力を借りて、この問題を解決して行くしかないと考えた。

「た、頼みますだ。カレー代を支払えなんて、会社から聞いていなかったんだよ」

「そこが貴女の駄目なところです。飯代の負担をどうするか、あらかじめ聞いておくのが当たり前でしょ」

呆れた人だとげんなりした。

「んだべが」

常識外れの行為が仇となったのだが、本人に反省の色がない。

（研修先でカレーライス代を支払わなかったというミスだけかな。……どうもおかしい。ホームヘルパーには不向きなのか……）

帰宅の途に着くタクシーの中で暗澹となった。

ニンジンジュースを飲んだ後、カレージの二階にあるアトリエの窓を開けて外気を入れた。気温はそれほど高くないものの風が無く、暖かい。

油絵具を点検した。ブルーが不足している。

（今日の分は保てるな。明日の夜、市川さんを組合事務所へ連れて行ったついでに購入すれば、間に合うだろう）

イーゼルに向って椅子へ座り、新しいキヤンバスへ鉛筆で下書きを始めた。

階下で妻の呼び声がする。

「市川さんからお電話ですよ。携帯へかけたけれども繋がらないって言っておられます」

「こつちから、かけ直すって伝えてくれ」

急いで階下へ降りて母屋に入った。居間のテーブル上に置きっぱなしになっていた携帯電話で、

「どうしたんです。いまだこから掛けていますか」

「こ、ここは会議室です。あ、おいらは、出勤してからずっとこの部屋に入れられて、な、何が何だかさっぱり分かりません」

ひそひそ話でもしているかのように、低い声だ。

「ちゃんと、働きたいって喋ったんですよ。出勤時にね」

打ち合わせ通りに台詞を言ったのかな、と不安になった。

「は、はい。所長さんが、社長に問い合わせるからって。困ってたっけ。うひゃひゃひゃ」

「笑う声が大きいですよ」

窘めた。

「お、おいらは可笑しくって、お腹が痛いくらいです。どうなるんでしょうかね。先生、この後は」

言葉とは裏腹に愉快そうだ。

「そのまま待っていて、兎に角、働きたいって頑張るんですよ。結果が出たら連絡してください」

現場にいるのならともかく、それしか言いようがない。

「あいよー」

午後五時過ぎに、彼女から報告の電話があり、今日は所長と話しをしたが決着がつかず、明日も星空介護ホームへ出勤し、今度は、本社の社長と話しを持つことになったとのことだ。

「上手くいかないときは予定通り、明日の夜、組合へ行きませんか。労働問題に詳しい、親友のフリーライターにも来て貰いましょう。いいですか」

自分一人の手には負えない事件だなど考えた。

「お、おいらは構いません。ど、どうせ社長とは喧嘩になるべから。おつかあは、そんななどは、早く止めて他の

仕事を見つけて言っただけ」

また諦め始めている。

「駄目なときは、そのまま引き下がらずにね。今月分の賃金と解雇手当を貰いなさい」

肝心な点を駄目押しする。

「二週間しか稼いでいないのに、も、貰えるべが。そ、そんな言い、ほ、ほんとに話があるのがー」

と、金のことになると直ぐ元気になる。

「あくまでも、折り合いがつかない時の最後、切り札に使うのです」

黙って、引き下がらせるわけにも行かない。

湖の東端にある駐車場に車を停めて、陽の当たる湖面を眺めた。空は薄青く山の木々が小豆色に染まっている。

（あーあ。おいらは、あほんだらだねー。そ、そんなおいらのために、先生があそこまで熱心にやってくれるんだがら、こいつは真面目にやんなくちゃ）

手で頭をこつんと叩き、ナップザックからノートとボールペンを取り出した。

河島五郎から、

「性行為に応じないと、首を切られるかも知れないと思っ

た理由が肝心です。考えてみなさいね」  
と云われている。

市川充子・当時三十五歳。人材派遣会社・微笑スタッフに登録して以降、青沢修一郎（当時五十八歳）から強制猥褻を受け、その果てに派遣先で解雇、派遣元でも登録の期限満了となって不來方市へ戻つて来た。

と題して、メモをした。書いたものを読み直すと同時に、当時のことが目の前に現れた。

立春が過ぎた日の午後九時に不來方バスセンターへキャリーバックを引つ張つて行くと、先に来ていた高杉馨が嬉しそうに手を上げた。頭の禿げ上がった周旋屋の中年男が吸っていた煙草の火を灰皿に押し付けて、

二人のチケット代は、俺からのプレゼントだぜ。しっかりと働けば正社員になれる。がんばれよ」

は、はい、お世話になりました。お、おいらと馨はもう不來方に戻らない決意だから、頑張るしかないんだよ」

両親が引きとめるのを振り切つて、出てきたのだ。

分かつている。おめーらはいいいコンビだぜ」

と云つて、周旋屋はおいらの肩を叩いた。

新宿行きの夜行バスの窓から、遠ざかる不來方の街灯り

と星の煌めきが見えた。馨は、横で眠っていた。上京した日の午前中に人材派遣会社・微笑スタッフで手続きを行い、

簡単な研修をしたあと、午後に会社が借り上げているアパートのジャガーハウスへ荷物を運んだ。おいらと馨は、同じ部屋に住むことで了解を得ていた。翌日、微笑スタッフからJCC工機（株）に派遣されて、おいらは自動車の製造ラインで、馨は部品の点検部門で働くこととなった。

スキルセンターでビデオを見せられて仕事の訓練をした。工場内を見学して臭気に耐えられるかどうかなどを聞かれた。

研修兼苦情処理担当の青沢修一郎氏が、

私は、高校を出たあと、ずっとこの会社で働いてきました。真面目に身を粉にしてやる人間は必ず報われます。頑張ってください」

と挨拶した。

おいらが馨へ、

「ずいぶんと苦労したんだな。背が高くてイケメンだしよ。偉い人だ。お、おらたち奮闘するべ」

「いけ好かない人だと思つわ」

彼女は同意しなかった。

「やきもちを焼いているのがよ」

馬鹿ね。女の勘。市川さんは初心だから分らないの」

と呟いて、頬を赤くした。

人材派遣会社へ登録したのは、不來方ハローワークで仕事を探して外へ出て煙草をふかしていると、周旋屋が近寄つてきて、

「どうです。いい収入のある会社を紹介しますよ」

は、どんなな仕事でもいいが、金になるんでしたら、

行きます。な」

傍で聞いている馨を誘つた。

話を聞いてみてからにしようよ」

彼女は慎重だった。

その辺で、ご説明しますよ。なに、ハローワークに情報が載っている会社ですから、ご安心ください」と勧めたからだ。

「それならいがんば、な、馨」

「……ま、聴いてからにするわ」

二人で周旋屋の後ろへついて行って、喫茶店へ入った。

面接と書類選考でなんなく入社出来た。契約の期間が三年と記載されてあったものの、周旋屋が、

「自動更新されやんす。あんたらは若いから、働き方次第では正規職員の道もありますよ。へへへへへ」

「そんなら、ぜひ。応援してください。な」

「……充子さんがそう言うんであれば、いいかも」

となつたのだ。

おいらと馨は親に隠れて同棲していた。それが、ひょんなことから親の知るところになり、親とどうでもいいような大喧嘩をし、

「こんなな不自由などこはごめんだ」

「親子の縁を切る。二度と帰るな」

「こつちのいう台詞だよ。なんだ、うだつの上からない教師の風情で父親ぶつてさ」

「なにイ」

団扇のような掌で頬を叩かれた。

荷物をまとめて家を飛び出し、カプセルホテルを転々とした。ホステスや新聞配達員、食堂の皿洗い、神社の掃除などをしたが、収入は低く欲しいものが手に入らない。

馨は、パチンコ店に勤めたが客からの嫌がらせで神経がおかしくなり、部屋に閉じこもるようになってしまった。

ジャガーハウスから派遣先のJCC工機までは、徒歩と電車の乗り継ぎ時間を入れると、約一時間かかった。ジャガーハウスは、八畳一間でロフト式。エアコン、電子レンジ、

洗濯機、冷蔵庫、パソコンなどがある部屋であった。十四の部屋があったが、誰が住んでいるのか互いに面識はない。光熱費込みで月額五万二千円の家賃がかかった。(えーっと。河島さんが喋っていたのは、“どんな条件で働いていたかってこともまとめておくように”ってことだった。んでも、どうして、そんなことが必要になるんださっぱりわからねーな。あーた、めんどくさいなあ) エンジンを止めてドアの外へ出た。湖の岸に下りて、北へ帰られずにいる白鳥へパンの耳を与えた。(そろそろ時間だ。おつかあを迎えにいかないよ) 人間ドックに入っている母親が、娘の来るのを待って帰り支度をしているころだ。

車へ戻り、市の南部にある病院へ向かった。

星空介護ホームから銀行口座へ、一か月分の給料と解雇手当が振りこまれた。再び不来方八ローワークへ仕事を探しに通ったが、自分に合うものがない。(うんだば、先生にびやっこ応援してもらうが。太い人脈があるようだしな)

自転車漕いで丘を越え、グリーンテラスの河島邸へ行った。先生は土蔵の中で、古くなったワインやウイスキー

などの片付け方をしていた。

「この間はお世話になりました。ほんのぺっこだどもお礼に林檎を買ってきたので、食べてください」

「そんなことはしなくていいですよ。用件はそれだけでいい」

白眼で睨まれた。

「メ、メモを書いてみました。じ、実は。お、おいらの仕事を探していただきたくて」

「カレー代を支払わなかった。それだけでなく、車椅子の押し方が悪かったなどと言われるんでは、介護の仕事は無理ですね」

と、彼は怒ってでもいるような口ぶりだ。コルクから液の零れたワインを両手に掴んで、庭石の脇に置いている。

彼が言っているのは、星空介護ホームがおいらを解雇する理由として、

「研修中に所長が再三指導したにもかかわらず、段差のあるところを無視し、強引に車椅子を押した。注意すると、

“こんなごどくらしいでしょ”と言い返した”と挙げたことを指している。

「あ、頭を使わないで、他人と話をしなくて済む仕事はながんべが」

「私は気が短いかからね」

「うんだば、そうするが」

食事が済んだ後、一角にホームバーを設えた客室でメモをもとに打ち合わせた。

「こんな程度では、まだまだ駄目ですね。労働条件とか、青沢修一郎とのやり取りがない。実証する記録なんかがあればいいんですがね」

「おいらは、ほんくらだから、思い出すのに一苦労です」

忘れたと思うって過去へ全部捨て去ってしまったのだ。

「ゆっくりやれば、時効に引つかかるんですよ。それで良いなら仕方もない。一度、この本を読んでおきなさい」

目の前に『本人訴訟』と題する一冊が置かれた。

「じ、時効ってなんですか」

セクハラ被害者は救われないのか、と思った。

「だから、それを読めば分かります。セクハラで訴える期限は三年間です。四年目に掛かったら、継続していたという証明が必要になってくる動定になります」

眼の奥は燃え上がり、何かを思いつめているようだ。

「は、はーっ。じゃじゃじゃ。お、おいらは勝てないかもしれないね」

平身低頭して頼む。  
「そつだな。新聞配達はどうですか。でも、バイクの運転が出来るの?」

彼には、なにか伝手が有るらしい。

「バイクは、お、おいら苦手です。だーれ、おっかなくて無理、むーり」

両手を顔の前で振った。

「職業を選んでいられる身じゃないでしょ。……そつなら、コルクを抜いて瓶を洗ってくれ。外に出すからさ」

そつ命じて、蔵の中へ入って行った。

河島夫人が、庭の東屋にポットと盆を運び、

「市川さん。少し寒いかもしれませんが、お休みください」

「は、はーっ。言葉に甘えます」

腐った数十本のワインを片付けて、土蔵の中の掃除をし終えたのは夕方五時であった。

先生が、

「上がって、一緒に食事をしませんか。メモを見てアドバイスもしたいしね」

「ご迷惑でしょうから、後でもいいですよ」

それよりも、明日からの仕事が欲しい。

がっくりした。

「まとめてみないと分からないね。やる気があるなら早くしたほうが良いですよ。いま新聞配達店の所長へ連絡を入れるから、明日、行くようにしてはどうですか」

「お、お願いします」

こうなったら、有りつけるものにすぎるしかない。

彼は、その場で電話の子機を使い、

「……うん。恩に着るよ。何か問題があれば注意して構いません」

とどこかへ電話をかけた。

「頼んでおいたから、直ぐに出勤しなさい」

全国紙と地方紙の配達員の仕事を確保してくれたのだ。

「は、はーっ」

客室から廊下へ出ようとしたときに、ガラスケースの中に猫を抱いた河島の写真が飾ってあるのに気が付いた。

「せ、先生。シャム猫ですね。ヨットも写っていますが、どこで撮ったんですか」

おいらは猫好きだ。

「葉山ですよ。友人の別荘があつてね。大学時代の仲間が集まった時に。そうさな、二十年前のことです。それが何かしましたか」

怪訝な表情をした。

「あ、青沢修一郎もヨットに乗ると話していましたので」「ヨットへ乗った場所は、どこだと言っていましたか。いつ、だれとだと喋っていました」

探るような目つきだ。

「湘南の海って。くわしいごとは分かんない」

彼は、樺造りのペンケースから西陣織を施した万年筆を取り出すとメモ用紙を手に、

「ふーん。青沢が乗っていた車の型と、ナンバー。馨さんが勤めていた不來方のパチンコ店の名前を伺いたい」

「は、はーっ。お、おかしなごどに乗っていた車は」Cのじゃなくて、豊里自動車のものでした」

いま考えても変だ。

「ほう。……自分たちが作っている会社のものではないとはね」

じっと考えこんでいる。

「か、馨がやめた店は、クラブRがすよ。クラブRは、パチンコの他にキャバクラをやったのだす」

馨は、日中はパチンコ店で掃除婦をやり、夜はキャバクラ嬢をさせられていた。

「クラブRか……。で、周旋屋の名前と連絡先は覚えてい

ますか」

急に質問の先を変えてきた。

「は、リサイクル業をやっているって言うてました。た、確か滝山村のクリーン岩鷲とかつて会社で」

滝山村は南部富士山麓の一角にあり、南部は不來方市と隣接している。

「廃品回収業ですか。……うーん」

歯で下唇を噛みながら書き留めたメモを見つめている。

「な、なにか気になるのですか」

おいらが遭った被害は、飛んでもないことに絡んでいるのかと考えた。

「いや、そういう事ではないです。失礼なことをお聞きしますが、家族と争いがあつたというのは、具体的にどういふことですか」

眼を鋭くしている。

（出来るなら、ずっとごまかして置きたかつたが、だめか）

と思った。

彼に対して、父は、とつに亡くなったことを伏せて、

「学校の先生をやりましたが、いまは、退職して家に居りますですが」

と嘘をついている。弟とそりが合わなくて、家を飛び出したとも説明してはいるが、父の暴力と暴言に耐えられなかつたのだ。父は、おいらが人材派遣会社へ登録した二年後に病で亡くなっている。

「お、おいらは、弟と違って頭が悪いんだよ。そ、それで、おとうが弟ばかりを可愛がってさ。こんなな能無しめって怒鳴るもんだからさ」

いま思い出しても胸糞が悪い。いつそのこと、親を殺し、自分も死のうと考えたことも度々あつたのだ。

「そうか、そうか。それ以上は、もう喋らなくてもいいですよ」

万年筆を用紙の脇へ置き眼を閉じた。

そこへ河島夫人がやってきて、

「市川さん。少しばかりですけど、お母さんへ上げてください。林檎のお返しですからね」

「は、はーっ」

小さな手提げ袋に入っているものは、わらび餅であつた。

「主人が先日、京都へ旅した際の土産品です」

「せ、先生。なんの用事で行つたんですか」

そんな話は聞いていなかったなと思つた。

昔、世話になつた人の七回忌だね。知恩院へ詣でてきま

した。ヨットの持ち主ですよ」  
「うらやましいですが。うんでは、おいらは帰りますだ。さー、明日がら忙しくなくなるな。えへへへー」

玄関の戸を開けて庭へ出ると、月がヒバの木のずっと高いところへ見えた。

「上機嫌になって、事故なんかに遭わないように、気を付けて帰りなさいよ」

「あいよー」

市川が帰って行ったあと、河島は、フリールボライターの志田浩二へ電話をかけて、

「急で申し訳ありませんが、相談したいことがあるので、うちへ来ていただけませんか」

「了解です」

と、相手は、待っていましたという返事だ。三十分後、志田が乗用車でやって来てガレージへ車を入れ、シャッターを下ろした。

つい先ほどまで市川が座っていた客室で、

「忙しいところをお呼び立てして申し訳ない。志田さんの手で、ちよいと調べていただきたいことがあってね」

「私で役立つ事があれば、どのようなことでもやりましょ

う。職業柄、こういった汚れ役は好みですから」

彼は、度の強い眼鏡の奥の瞳を細めた。痩せ細った体の猫背である。

「一つはＪＣ工機内の労働運動がどんな具合かについてです。ヨットへ乗る労働者は、経営者と密接な関係にあると思われる。それから」

と切り出して、警が勤めていたクラブRでのいじめの実態、それに周旋屋がやっているリサイクル業の岩鷲に関する巷の評判を調べていただきたいと頼んだ。

「ゆっくりと且つ、急ぎですね」

「うん。市川さんの場合は、裁判になる可能性があるともみているんでね」

裁判ともなれば、費用が掛かる。勝てる見込みがあるのなら弁護士に頼むのも惜しくはないだろうが、セクハラ被害の時効を過ぎてしまえば、勝つ見込みは薄い。

「フリーライターのほくとしては、大本は労働者派遣事業法にあるんだし、男女雇用機会均等法を悪用しているんだから、そこところを彼女に分かって欲しいいな」

あつという間に夏が過ぎた。

市川は、販売店で新聞の折り込みチラシを揃えていた。

揃えられたチラシは、男性の店員が折機へ運ぶ。

店主が、

「充子さん。冬の配達はきついですよ。男子だって泣きたくなるくらいだ。根を上げるなよ」

「お、おいらはへいちゃらだ。こつ見えてもＪＣ工機では、鉄板の入った靴を履いて自動車の組み立てをやっていたんだから」

と答えて、男勝りの太い足腰を小さく開き四股を踏んで見せた。

「ほつ。それなら安心です。慣れたら、もう一つコースを増やして貰いたいけど、良いですか」

「は、はい。やりませうだ」  
収入が増えることは、嬉しい。身体には自信がある。

「河島さんには、宜しく伝えておいてください」

「はいよー」

と返事をした途端に、

（あのことは、どうなっているだろう）

と思った。

自宅で昼寝をした後、河島へ電話をかけて、

「先生、おいらのセクハラのは、どうなってるんだべ」

「どうもこうもないでしょ。被害の経過を終わりまでま

めなさいって指示しましたよね」

「は、はーつ。た、確かに。じゃじゃじゃ、すっかり忘れていったつたよー」

自分では、何もかも喋っていたつもりだった。考えてみると、河島へ半分も話していないことに気が付いた。

ぼんやりした頭を水道の蛇口の栓の下へ当てて、栓を捻った。頭の芯と首が冷えて、気がしゃんとなった。

「ゴマ煎餅を一枚口にはさんで、木目のある丸い食卓にノートを広げた。

母が、

「充子。畑に行ってくるから、ピンキーの面倒を頼むね」

「あいよー」

ピンキーとは、飼い猫の愛称だ。

青沢修一郎から受けたセクハラの記憶を辿り、鉛筆の先をノートの白い面へ付け、文字を置いた。

派遣元との契約は三年間。派遣先のＪＣ工機との契約期間は一年間で、一年ごとに更新する仕組みであった。

ＪＣ工機での労働条件は、四日間勤務して二日間の休みだった。拘束勤務時間は、日勤が午前八時半から午後八時半まで。夜勤は午後八時半から午前八時半まで。二時間置きに一分休憩。昼休み休憩時間は、日勤の時が正午から

午後一時までで、夜勤の時間が午前零時から一時まで。

時間給は日勤が一〇〇円、夜勤は一一五〇円。時間外時給は一三七五円、法定外休日時給は一四八五円、深夜割増手当は時間当二七五円。労働内容は、JＣ自動車の製造エンジンルームやコンデンサーの組立、検査及びそれらに付帯する業務。

馨は、部品の検査部門で働いた。勤務形態は、ほぼ同じだったが、おいらが働いている時間に、アパートで休み、帰るころは、出勤していなかった。たまに、同じ日が休みになることもあったけど、彼女のプライベートなことは、さっぱり分からなかった。

(えーと、あとは何を書けばいいのかな。あ、そうだ)

職場の上下関係は、工員が市川充子・被害者本人、リーダーは山元六輔(青沢修一郎氏のセクハラについて相談をした相手)。工長は江塔信三、係長が田幡洋治、研修兼苦情処理担当は青沢修一郎(こいつが、おいらへセクハラをした加害者)だ。

(次は日付順に進めばいがんべ。思いつくのも嫌だけど、仕方がない)

U年一〇月 一緒に上京した馨が、JＣ工機を退職し不來方市に帰ってしまった。日常生活上の相談をする相手が

いなくなり、心細くなった。

(馨が急に解雇されたのは合点がいかない。おいらに、何も相談しないで、帰ってしまったんだ。あいつは、いまころどうしているんだべ?)

蝦夷森の「空の城」にある旧高松堂の風景が、一瞬間をよぎった。

一〇月中旬ころ。青沢修一郎氏(当時五八歳・妻子あり)から、昼の休み時間に、「今度、食事に行こうよ」

と声をかけられた。仕事場に押し掛けられ携帯電話の番号を聞かれた。

その時、職場の品質証明担当の工長が、

「何を聞かれたの」

と言ったので、青沢から誘われた状況を話した。

「ふーん。用心してください。あとあと職場で問題になるかもしれないぞ」

と注意を受けた。

青沢修一郎は、現場の仲間内では「人事課長」と呼ばれていた。馨が故郷に戻った直ぐあとだったので、なんとなくこつちの様子を窺っていたのではないかと感じた。おいらを舐めまわすように見たからだ。

一月上旬ころ、青沢修一郎から、

「仕事上の意見を聴きたいので、会って欲しい」

と言われ、仕事の帰りに会社の駐車場(だったと記憶している)で待つ青沢の車へ乗った。午後八時半過ぎだった。仕事の話は何もなく、鎌倉までドライブして午後一時半にアパートへ帰った。青沢は温河町の小陀に住んでいると聞いていた。青沢が乗っていた自動車は豊里自動車製のもので、ナンバーが「Z00七七」であった。

年が明けたV年一月初旬以降、青沢から何度も携帯に電話がかかってきた。

工長へ相談すると、

「派遣元へ報告したほうがいいぞ」

とアドバイスされた。直ぐに微笑スタッフの大川栄三課長へ伝えた。二月初旬、同僚の女性たちと一緒に職場の男性たち、それに青沢修一郎へバレンタイン・チョコレートを渡した。

二月中旬、青沢から再び、

「仕事上のことで話したいことがあるから会ってくれ」

と言われ、仕事の後に会社の駐車場(だったと記憶している)で待つ青沢の車に乗った。午後八時半から翌日の午前零時半まで会った。

青沢は、

「バレンタイン・チョコは、色んな女から沢山来たが、市川さんからのが一番うれしかったよ。馨さんが居なくなつて寂しいだろう。困ったことは無いか」

と言った。葉山の海岸まで行ったので帰りは遅くなった。

青沢は、

「これから俺のことをアーチャーと呼んでくれ。職場にはオレと会ったことを話すなよ」

と言った。

三月中旬、青沢から、

「緊急な用事がある」

と誘われて仕事の後に車へ乗った。午後一時過ぎに車中でキスを強要されそうになり拒んだ。キスを強要されたことを派遣元の同僚とJＣ工機のリーダーに話したが、良いアドバイスはして貰えなかった。

四月中旬、青沢から、

「研修担当者として、参考までに、派遣労働者が住んでいる部屋の状態を見に行きたいので協力してくれないか」

と求められて、アパートへ来てもらった。青沢は、用事が済んでも中々帰ってくれなかった。テレビを見ている最中に青沢が突然、おいらのスカーツの中へ手を入れて来た。



「なにするんだよ」

と怒鳴って部屋から追い出した。

五月中旬、青沢から、

「市川さんの将来に関わる件で、重大なことを教えたいので会ってくれないか」

と誘われ、仕事の後に青沢の車に乗った。

青沢が、

「現場からこんなものが報告されているんだ。よく考えるんだな。首にするかどうかを決めるのは俺の権限だがね」

と言って、解雇する対象者を記してあるA版の書類を見せた。

「オレに従っていれば安心だが、どうする。嫌なら今日限りで、終わりだぞ」

「おいらは、帰るところが無いんだよ。やだよー」

「いやなら首だぞ。一回こっきりだ。我慢して、目を瞑っていけば済む」

と言って、おいらを無理矢理ラブホテルに連れ込んで行為を強要した。

ホテルからの帰途、彼は、

「オレが退職するまで、面倒をみてやるから安心。あと三、四年は大丈夫だ」

と言った。仕事のことを考えると不利になると思い、誰にも相談しなかった。

六月中旬、青沢に再び、

「解雇するかしないかはオレが決める。どうする」

と脅迫されて、ラブホテルに連れ込まれ性行為を強要された。九月上旬、思いつくことがあり、青沢に頼んで日光の江戸村に連れて行って貰った。観光地の様子と一緒に青沢の姿をビデオに収めた。

彼が、

「録画したものを消せ」

と言った。その場で、一部分を消去した。十月中旬、派遣先が、一方的にJＣ工機から他に替えられた。

彼に、

「もう連絡を取りたくない。電話を寄越さないでくれ」

と告げた。十一月上旬、父が急死した。不來方の家には母と弟が居るだけになった。母のことが心配になった。

W年七月中旬、時間が経つにつれて、JＣ工機に勤めていた時のことが悔しくなり、JＣ工機の総務部に電話をかけた。青沢の自宅へ電話をかけて、謝罪を求めようと思ったのだ。

「青沢修一郎氏からセクハラを受けた。調べて責任をとっ

てほしい。青沢氏の自宅の電話番号を教えてくださいか」

と伝えたが、相手にして貰えなかった。

電話口に出た相手（最初は女性のHさん、次いで男性のJさん）が、「まさか」とか、「信じられない」と言うので、青沢修一郎氏の携帯電話番号を教えた。

八月上旬、会社からは何の返事も無かったが、青沢から電話がかかってきた。

「お前、会社に何をしゃべったんだ。会議で問題になっているぞ」

「と言うので、おいらは彼に対して、

「あなたのした行為はセクハラだ。謝罪してほしい」

と訴えた。彼は、

「合意だっただじゃないか」

と言い逃れようとした。おいらは、

「無理やり犯された」

と突っぱねた。彼がアパート（会社の寮）に訪ねてきたので、部屋には入れず外で話し合った。彼は、その後毎月二度ほど私のアパートへやってきて、なんとか事を穏便に解決しようとした。

「謝れ」

「勘弁してくれよ」

と言いかた出てこいよ」

と聞かれた。いつかまた出てこいよ」

とも言っていたが、なんとなくほっとしているような声の色だった。

不來方で就職先を探したが中々見つからなかった。雇用保険の受給が切れたあと、宮澤賢治の名を冠した複合施設でアルバイトをした。仕事が見つからないのとJＣ工機に勤めていたころの酷い体験が重なって、青沢に対する怒りがこみ上げてきた。そのころ、絵画教室でモデルになり、河島氏と知り合い、JＣ工機でセクハラ被害を受けたことを話した。

「着いたか」

「いつかまた出てこいよ」

と聞かれた。いつかまた出てこいよ」

と聞かれた。いつかまた出てこいよ」

(あー大変だった。やっとこさ、かたづいた)

新聞の休刊日に、書き留めたノートを持って河島家へ向かった。高松の池の畔を通って丘を越えグリーンテラスへ着くころは、もう日が真上に有った。

河島は庭に出て、空手の練習をしていた。

「先生、ようやくまとめました。これでよがったら、あのごとを宜しく頼みますだ」

「着替えるから、東屋で待っていなさい。それまで、庭の花を愛でるのもいいぞ」

「ははーっ。おいらは、今日は暇ですから、何時間でも待ちますだ」

先生の脚を見ると足首が細い割に、ふくらはぎは産卵前の魚のように丸く膨らんでいた。花のないドウダンツツジが、濃い緑を宿して繁みを造り、水を引いた池の畔に紅色の花片をつけた紫陽花が、樹幹から射す陽を浴びていた。「ご苦労様ですね。お待ちさせてすみません。どうぞ召し上がって」

と河島夫人が茶菓子を運んできた。

「い、いつもすみません」

早速、クリーム煎餅を頬張った。

(先生は、なんで、おいらを無償で支援してくれるのだからか)

と思った。

庭に敷きつめた石へ下駄の音がして、

「待たせましたね。どれどれ見せて頂こうか」

先生がやって来た。

「か、空手の邪魔をして、すみません」

口の中に残っている煎餅のかけらが、声と一緒に唇へ飛び出した。

「ゆっくり、お茶を飲んでください。その間に、私が目を通して見ますからね」

おいらは、持って来た手提げ袋からノートを取り出して、先生へ手渡した。

「……うーん。なるほど、なるほど……」

下唇を噛みながら首を傾げている。

おいらは、他人を寄せ付けられない態度がちよっと怖くなり、東屋の外に出て柱の陰から河島をそっと見た。

(おとうのごとで嘘をついていたが怒ったのだから)

(それとも……、青沢修一郎との関係が一度きりでなかったことに、呆れたのだが。助けて貰うのは無理がな)

と、うるたえた。

陽射しが時折、樹陰を通して足元を揺らす。それを見ていると眩暈がするほどだ。青沢から強いられたときの性行為を思い出し、身震いした。

「市川さん。こちらに来て座りなさい。聞きたいことがあるから」

気が付くと、先生が東屋の柱の向こうに顔を出して呼んでいた。眉間に深く皺を寄せて考え込んでいた先ほどまでの表情とは異なり、人懐こい顔に戻っていた。

慌てて、東屋へ入った。畏まって椅子に座る。

先生が、  
「要領よくまとめましたね。貴女としては上出来ですよ。ところで、お伺いしたいのですが」

と切り出して、いくつかの疑問を投げげてよこした。

その疑問とは、

人材派遣会社との契約期間は、三年となっていたはずですが、実際はそれ以上就労していますね。何故ですか。

JC工機を解雇されて以降、セクハラを受け続けていませんか。

青沢氏は、今もJC工機に勤めていますか。青沢氏の住んでいるところは、本当に本人が喋っていた温河町の小住ですか。子どもは男性ですか女性ですか。

そもそもJC工機の研修兼苦情処理担当だった、というのは本当ですか。

JC工機の駐車場に出入りする際は、検問所を通らなくてはならないようですね。敷地内には監視カメラも備えつけられている。青沢氏が市川さんを迎えに来た場所は、敷地外にある民間の駐車場ではなかったか。

青沢氏の車中にどんな物がありましたか。例えば、カーナビやビデオ・カメラはなかったですか。

というもので、矢継ぎ早に聞いてくる。

(年寄りのくせに、身なりだけはいい格好して、文句を付けるのか)

と、いらついた。

「三年以上になったのは、契約期間が“仕事のあるうち”という条件で延長されたからだよ。アーチャーの、あ、こめん」

訂正した。どうしても、男女の関係を強いられたころの、自分でも理解できない複雑な感情が身についていて離れな

い。  
「いい加減にしないと、聴いているのがつらいね。バカバカしい」

げんなりとしている。

「青沢さんの車にはゴルフバッグが積んであっただよ。それから犬の餌缶も。あとのごとは分かんない。答えられない無理な質問だべ」

と、質問を遮って答えた。怒りでかっとなって、身体が痙攣した。

「いま直ぐに全部答えろっていう事じゃない。あのね。まず、最後まで聞きなさい。……日光江戸村への旅行の際にビデオを残したのは良かったですよ」

眼が一瞬柔らかくなったのが分かった。

「うんじゃ、先生の仰るとおりに続けてける。分かんないのは答えられないから」

ここで怒らせるのは損だと思った。河島には、介護施設を解雇された際だけでなく、住民税の減免と国保税の減免を受けたときにも助けられている。

「私だって好き好んでやるわけではない。貴女が困っているというから、手伝っているだけですよ」

無然としている。

「おいらが悪かったです」

謝ったが、本当はどうしたらいいのか分からない。

「一人でやれるのなら、私に頼らずにやればいいのです。

……一応、このまま気になった点を話します」

続けた疑問とは、

携帯電話の着歴と音声の記録は残っているか。

警さんが、突然、派遣先を解雇された上に人材派遣会社の登録をも解除されて不承方に帰った原因については、何か思い当たる点はないですか。

セクハラされた事実を、他の派遣労働者仲間と話したことは無いですか。第三者の証言として、裁判などで決定的に役立ちますよ。

市川さんのお母さんと弟さんは、貴女がセクハラ被害に遭ったことを知っていますか。

ということだ。

「おかんには関係ないことだから喋っていないよ。まして、弟なんか話したら馬鹿にされて刺し殺されるかも知れないから、やんた」

むかついた。

「感情的になるな。落ち着きなさい」

冷静だ。

「結局、おいらの話を疑っているんだべ。女の絵ばかり描く頼りにならない爺だな」

分かってくれない相手にもどかしさを覚え、怒りのあまり息苦しくなって頭の中が真白くなった。

「なんですか。親身になって応援しているのに、侮辱するのもいい加減にしなさい。いまの言葉を撤回しないと、応援は止めますよ」

眼をひん剥き、開いているメモ用紙を閉じて、ばさっと放り投げてよこした。

「だつてさ、おかに喋ったら家から追い出されるだよ。

馬鹿で糞つたれの婆なんだ」

気が短い上に鬱症状に陥っている母親には、「おらほの娘は傷物になった。嫁の貰い手がなくなったじゃ」と泣かせたくない。

「それは、いま、私に何の関係もないことです。要するに侮辱したことを撤回しないのなら、もうお帰り願いたい」

「オシヤレただけで、男を騙すためにやっている、ひどいおっかあなんだよ。うんだがら、おいらはいつも菜っ葉服を着ているんだ」

家庭の事情を、なんとかわかつて欲しい。

「頭を冷やしてお考えください。弁護士にでも相談すればいいでしょう。志田君に訊いてみるんですね」

さつと椅子から立ち上つて、背を向けると、後ろ手を振りながら庭を横切つて母屋の方へ向かっていった。取りつく島もない。

(こつなつたら仕方がない。自分一人でやるしかない)

と考えて、メモをナップザックへ入れ、河島邸を出た。

自転車を漕いでグリーンヒルの坂を下り、国道2号線のバイパス交差点で信号が青になるのを待った。

(それにしても、先生は「C工機の駐車場のことを良く知っているな。どうやって調べたのだべ」と気になった。

河島は市川が帰ったあと、書斎に入って市川が見せたメモの中身を思い出しつつ、大学ノートへ書き込んだ。

開いたノート内は、左側のページに市川の話す内容が記され、右側のページには自分の感じた疑問と調査の結果が記されている。

(市川さんは、この私にまだ喋っていないことが多くあるのではないか。もしかして、本人すら気が付いていない事実があるのだろう)

(突っ放しておけば、自分の力で解決して行くに違いない。頼まれたら、最後の手伝いをすればいいのだ)

そんな風に考えながら、窓際に立つて庭を見下ろした。辛夷の木の葉が灰色の枝先で風に揺れていた。外は小雨となり、雲間から射す光の中で雨粒が琥珀色の真珠のよう

に丸くなって地上へ降りている。

「暴力を受けた被害者の苦悩は、普通の人には解らないのだ。そういう私だって、職場で似たような体験をしたが……。仕返しをしたら、終わった後の悲しみが残るし」

下唇を強く噛んだ。

風の流れが変わった。開放されたドアから中に入って来た妻の美登里が、

「何も、あんなにきつく言わなくても良かったんじゃないの。傷ついた女性を、冷たい非常な世間に放り出すなんて可哀そうだよ」

「大丈夫だろうよ。性的被害者は情緒が不安定になると思う。親からも暴行を受けているんだから、重症になる」

市川は、PTSDの状態に陥っているらしいと考えているのだ。

「志田さんの意見も聞いてみてはいかがです」

彼女は、いつになく心配している。

「……そうするよ」

市川は冷静さを取り戻したら、私の疑問について答えを出すだろう。そうしないと、この事件は解決しない。

「あなたは、昔からいったんこうだと決めたら引かないのね。他にも相談事を頼まれているから、構ってなんかいら

れないでしょうけれども」

「ご飯の用意が出来ましたと付け加えて、彼女は先に階下へ降りて行った。

私は、町医者だった父の遺産を食いつぶしながら、無料の「よろず相談ごと」を引き受けているのだ。

志田へ、至急の連絡をとった。

市川が自宅の居間で夕食を摂ると、母が、

「充子、おまえ今日は機嫌が悪いな。おらがなが悪いことを言ったべが」

はらはらしながら訊いた。

「じゃじゃじゃ、おかんは感がいいな。お、おいらは河島先生がらしたま叱られたんですがすよ。気にすんってばさー」

米粒のついた箸を持ったまま、手を忙しく振った。

「うんだが。先生さ失礼なことをしたんでないの。おまえは、瞬間湯沸かし器みたいな女子(おな)だからな。さっぱり変わんない」

ちゃぶ台の向こうで、「ご飯に手もつけず目をしょぼつかせた。

「おいらのごとは構うなって言ってたべ。あとで話すって

ばさ」

飯を口の中へ掻きこんで、逃げるように寝室へ戻った。

新聞配達の仕事が始まるまでの時間を、少しでも眠らなければならぬ。

(あーあ、どなたにしたらいいんだべ。おかんに心配をかけたくないし、かといって内緒にしているは、この先、青沢との話し合いが出来ないしな)

(明日、青沢へ電話をかけてみるか)

気持ちを切り替えて目を瞑った。

一年後。不來方地方を見下ろす南部富士山の二合目まで冠雪した日の午後。河島邸の客室に河島と市川、フリーライター・志田浩二の姿があった。

市川が、ノートを開いて、

「去年は、済みませんでした。お、おいらの相談に乗ってください。志田さんにも、一緒に来てくれて頼みましたな、いがんば」

横でちょこ念と座っている志田へ目配せした。

「私は、あくまで依頼人の意思に従います」

志田は、度近眼の眼鏡の縁を指で押し上げた。

「いいですよ。二度、三度まで許します。言って置きま

すが、この件が終わったら、私には一切相談事を持ち込まないで貰いたい」

河島が突っぱねた。

「は、はっ。うんではべっこばかり喋りますだ」

(なんだが、やっぱり怒っているようだな。困った)

(うんでも志田さんがいるがらやっていけるかもしれない。兎に角、青沢がら金を貰えさえすればいい。だめでも青沢に恥をかかせてやりたい)

と、おいらは思った。過去一年間、志田に手伝ってもらいながら駆けずり回った中身を、三時間かけて喋った。

先生は、おいらが持ってきた資料をじっくりと読んでいる。ICレコーダの録音を再生して聞きながら、音声を変えたページと照らし合わせて何度もめくっている。

青沢修一郎からの手紙と弁護士からの手紙を見比べて、

「うーん。こんなことを書いてきて、何を狙っているのだ」

と考え込んでいる。送られてきた派遣仲間からの手紙を見て、

「名前を出さなくてくれというのでは、法廷に持って行かないな」

下唇を噛んでいる。

「お袋さんと弟さんが理解してくれたのは良かった。どれ、取り掛かるとするか……」  
資料を掴んで、ホワイトボードへ書き込みを行った。眉根が深くなっている。

志田と顔を見合わせ、堪らず、  
「せ、先生。お、おいらは、どうしたらいいか。訴訟するしかないと思うが、応援してくれるべが」  
おっかなびつくり尋ねた。  
振り向くと睨むような目で、

「私が昨年の秋に述べていた疑問点への答えは、出ていないね」  
低い声で叱った。

「ぎ、疑問って？ あ、あの何でしたっけ」  
慌てた。さっぱり記憶にない。

「馬鹿者、これですよ」  
テーブル越しに、メモの書かれてある紙を放り投げて寄越した。

「青沢が、貴女を最初に呼び出した駐車場の場所さえ、はつきりしていないですね」  
メモを読むと、一年前に示された疑問点への答えが出て

いない。

「青沢へ出したという手紙の控えは、残していますか。青沢からの手紙はあるけど、それだけじゃ片手落ちだ」  
「ここが肝心だぞという目つきだ。」  
「いえ、あの、それは……」  
「コピーしていないと気が付いた。」  
「志田君。ちゃんとフォローして下さいよ」  
傍で、煙草を吸いながらぼけーつとして座っている相手に注意した。  
志田は、

「は、だ、大丈夫。手ばかりはしませんから」  
慌てて灰皿に灰汁を落とした。

「弁護士会が相談を受け付けなかったのは、なぜ。会長は何を言ったんですか」  
怪訝そうだ。

「おいらが、青沢のセクハラを最後まで断り通さなかった。逃げ出して近所へ駆け込むとか、警察に訴えることも出来た。それをしないのは駄目だってんだよ」  
眼に悔し涙が浮かんだ。

「あれは酷い弁護士でしたよ。年を食った肥えた大年増のけばけばした。いやな相手です」

代表取締役 山口吉見

被告 株式会社微笑スタッフ

代表取締役 田丘新一

訴訟の価格 六〇万円

貼用印紙額 六〇〇〇円

請求の趣旨

一、被告青沢修一郎は、原告に対して、二〇万円を支払え。  
二、被告ＪＣ工機株式会社は、原告に対して二〇万円を支払え。

三、被告株式会社微笑スタッフは、原告に対して、二〇万円を支払え。

四、訴訟費用は、被告らの負担とする。

との判決を求め。

請求の原因

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

よって原告は被告青沢修一郎、被告ＪＣ工機株式会社、被告株式会社微笑スタッフに対して、それぞれ請求の趣旨記載の判決を求め。

.....  
不來方簡易裁判所に訴状を提出したあと、志田浩二の乗

不來方簡易裁判所 御中  
原告 市川充子  
被告 青沢修一郎  
被告 ＪＣ工機株式会社

訴状

乙年五月一日

この日、三人による作戦会議は深夜まで続けられた。  
.....

「は、はーっ」  
一喝された。  
「良いですか。これから尋ねる点について、きっちり答えたりなさい」

「まなじりを上げて宙を睨んだ。」  
「そ、そでがす。お、おいらは、青沢をもう信じておりません。あどのごとは、せ、先生にお任せします」  
類の涙を手の甲で拭った。

「良いですか。これから尋ねる点について、きっちり答えたりなさい」  
「まなじりを上げて宙を睨んだ。」  
「そ、そでがす。お、おいらは、青沢をもう信じておりません。あどのごとは、せ、先生にお任せします」  
類の涙を手の甲で拭った。

志田が口を挟んだ。

「弁護士のこととは一理ありますよ。でもね、被害者に全部責任を被せるのは、ずいぶんだね。もはや、弁護士は当てにならない。悪と、闘うしかない」

まなじりを上げて宙を睨んだ。

「そ、そでがす。お、おいらは、青沢をもう信じておりません。あどのごとは、せ、先生にお任せします」

類の涙を手の甲で拭った。

「良いですか。これから尋ねる点について、きっちり答えたりなさい」

「まなじりを上げて宙を睨んだ。」

一喝された。

「は、はーっ」

この日、三人による作戦会議は深夜まで続けられた。

乙年五月一日

訴状

原告 市川充子

被告 青沢修一郎

被告 ＪＣ工機株式会社

用車で河島邸に向かった。

緑色に変わったグリーンヒルの向こうへ、南部富士山が鷲の羽を広げたように端坐していた。河島邸の客室に設けられた作戦本部へ入ると間もなく、河島が部屋に出てきた。

壁際のテーブルには、ビデオの録画をダビングしたCDと、ICレコーダに録音されたテープ、被告とのやり取りをした手紙、派遣仲間からの手紙、青沢修一郎からの着信履歴を残す古い携帯電話などが置かれている。曇りガラスで仕切られた一角には、高機能のデスクトップ型PCが二台、持ち運び用のノートPCが二台、資料をPCへ取り込むためのスキャナ機器、スチール製の書棚、高感度カメラ、印刷機、カセットレコーダ、ビデオデッキなどもある。

おいらは、河島の指導を受けて河島邸のPCを使い、四か月かけて訴状と証拠書類をまとめたのだ。四か月もかかったのは、間に東日本大震災が起きて一か月半、作業が中断したからだ。

「先生が監修してくれたお蔭で、無事済みました。これから、どうなるんでしょう。お、おいらは、勝ちますか」

一瞥して、

「まず、焦るな。相手に報復することが出来るのだけは確実ですよ。さ、二人とも立っていないで座ってください」

椅子を指さした。

「は、はーっ。うんでも、お、おいらは心臓がばくばくして、頭もぼろっとなってますだ」

膝が震え腰に力が入らない。

苦笑しながら、伸縮性のポインターを取り出して、

「志田君が調査してくれたから、大分、論述に役立った。あとは、馨さんの証言を取り付けさえすれば見通しが効く」

続けて、

「見給え、黒い文字の部分は完成しているが、青い文字の部分の調査できていない個所で、赤色の文字の部分の危険性を示している」

大きなホワイトボードの表面にポインターの灯りを当てた。おいらが志田の助けを借りて調べ、当たりつくしたところは、黒色の文字で、

・ 青沢が退職した時期。新しい勤め先（株）フロート）

・ 青沢の現住所、電話番号、家族構成。

・ 青沢の経歴（JC第一労組の破壊工作者）。趣味（ゴルフ）、所属団体（生産性向上委員会）

・ 管轄の県労働局への訴え（受理）。

・ 所管の警察署への訴え（受理）。

でしょう」

ふーっと思を吸って、

「内容証明書付きで配達されますから、市川さんは、家を留守しないように」

よく聞いておけという目つきだ。

黄の文字で、

・ 青沢氏は、強制猥褻ではなく、合意だったと反論してくるだろう。

・ ビデオは単なる旅行の記録であって、セクハラの本拠として希薄だと反論してくるだろう。

・ 市川さんが書いた手紙の一部分を利用して、攻撃してくるだろう。

・ 市川さんが不來方に戻ったあと、直ぐに電話をかけて来たのは「元上司としての気配りだった」と反論して来るだろう。

などと表示されている。

「じゃじゃじゃ、おいらはマンガ喫茶にも行けないんですか。早く判決を出して貰いたい。金にならないことで、暇をつぶしたくない」

黙って二人のやり取りを聞いていた志田が、

「あ、ね。これは市川さんの問題なんです。貴女が、訴

「黄色の文字は、相手が反論してくる可能性のある個所です。おそらく、抗弁してくる時期は、法廷が開かれる直前

の脅迫文（これは日弁連の会長へ送る必要あり）。

・ 市川充子の自宅周辺を窺っていた車は（市川充子さんの母親が目撃した）？ 被告との関わりはあるのか？

と表示されている。

「黄色の文字は、相手が反論してくる可能性のある個所です。おそらく、抗弁してくる時期は、法廷が開かれる直前

・ 弁護士会への訴え（証拠不十分として引き受け不可）

・ 法テラスへの訴え（時効として引き受け不可）。

・ JCT機への訴え（回答有 研修時にイジーボイス制度について周知しているから責任はない。市川充子氏からの電話は、青沢氏と連絡を取りたいとのことであって、セクハラ被害の訴えだったとは報告されていない）。

・ 微笑スタッフへの訴え（回答有 青沢修一郎氏が敗訴した場合に損害を賠償する）。

と記され、青色の文字で、

・ 高杉馨（三十八歳）の証言。

・ 青沢修一郎氏の息子の勤め先。

・ 青沢の顧問弁護士の経歴。所属先 横浜中央合同事務所 赤色の文字で、

・ 青沢修一郎が弁護士を通じて先制攻撃してきた理由は何か？ 弁護士が手紙で書いた「騒ぐと裁判所へ訴える」

の脅迫文（これは日弁連の会長へ送る必要あり）。

・ 市川充子の自宅周辺を窺っていた車は（市川充子さんの母親が目撃した）？ 被告との関わりはあるのか？

と表示されている。

「黄色の文字は、相手が反論してくる可能性のある個所です。おそらく、抗弁してくる時期は、法廷が開かれる直前

えたいというから、私たちは親身になっている」

真つ赤な顔をして続け、

「心配して応援しているのに、そんなでは駄目ですよ。」

しっかりとしてください。この、ほんくら頭」

業を煮やして頭を手で叩いた。

「じよ、冗談だよ。お、おいらは、先生にべっこ甘えてい

るだけなんだ。勘弁してくれい」

志田の肩を思いつきり突いた。

「いててー。これなんですよ、いつも。この間なんか、私

の身体を投げ飛ばしたんですから」

美登里が、ドアを開けて中に入ってくると、

「あらあら、賑やかですこと。お待ちせしました。お菓子

とコーヒーをご用意しました。どうぞ」

「ま、待ってましただ」

おいらは、盆の上から受け取ってテーブルに乗せた。南

部せんべいを食べながら、

「か、馨の奴はなかなか捕まんないだよ。あいつが何が、

有利になることを知っているとも思えないけどな」

と首を傾げた。煎餅の欠片が口の端から零れ、慌てて掌

に受け止めた。

「食べてから話せよ。下品な女子だ」

志田がしかめ面をした。

「私が調べたところによると、高杉馨さんのお父さんは昔、

高松堂の住職をされていたが、堂が廃止されたあとリサイ

クル業を始めている」

一息次いで、

「一人娘の馨さんが、家業を嫌ってクラブRに勤めたから

です」

ホワイトボードに記された系図をポインターで示して、

話を続けた。

(一体、こんな詳しいことを、どうやって調べたのだ)

と思った。

「岩鷲リサイクル店は、知人の彫り物師と一緒にクラブR

へ出入りしていたという情報がある。裏稼業で周旋屋を

やっていたとも」

彼の手元のメモには何かが書かれていた。

「馨さんがJ-C工機での仕事を止めさせられて、微笑スタ

ッフとの契約を解除して不來方に帰った理由は、何か」

あくまで完璧を期そうとしている。

「分かったですよ。志田さんとこれから会いに行ってみます

だ。うんでも、どこで稼いでいるのか、親御さんに訊いて

も喋ってくれないしよ」

考えあぐねた。

「それから、青沢修一郎氏の弁護士がやった行為は、弁護

士法に抵触している可能性も大きい」

聞いていて、この先の法廷闘争は、重大なことになりそ

うだなと思った。

「お、おいらは、どんなことになっても訴えは取り下げま

せん」

思わず歯を食いしばった。

「青沢修一郎氏の人生を駄目にしてしまうかも知れない。

青沢は職を失い家庭崩壊になるかもしれない。暴力をぶ

るつてくる可能性もあるぞ」

と言って先生が睨んだ。

「怖いですよ。そ、そんなら、東署の強行係りの刑事部長へ

話しておくだ」

東署の刑事部長から、「何か心配なことがあれば、いつ

でも連絡してください。パトロールをして見張りますよ」

と指導されている。

池の畔へ車を停めて、公衆トイレの石段を上がり、杉木

立に囲まれた坂道を登った。山鳩が喉の奥で声を鳴らし、

二人の様子を窺うように見ていた。

舗装された道から逸れて山道へ入った。廃止された高松

堂は、「空の城」と呼ばれる蝦夷森の中腹にある。馨は、

元は高松堂であった家屋に住んでいる。

馨の父親から教えてもらった携帯電話に電話をかけて、

ようやく相手と連絡が取れたのだ。

彼女は、

「もうあたしのこと忘れてください。充子さんが知って

いる昔の女じゃないわ。あたしは、泥沼の商売に戻つたる

くでなしなのよ」

と、半ばふてくされた塩梅だった。彼女は、昔の伝手を

辿ってクラブ・クウインでダンサーを勤めていた。

「お、おいらは、えと、えと……。困ったことに遭って、

い、一応、馨に訊いておくことがあるだけなんだ」

何も参考になる証言は聞き出せないだろうと考えたが、

河島に約束した手前、確かめる必要があるのだ。

「ふーん。……じゃ、来て見たら。あたしの気が変わらな

いうちがいいわよ」

煙草を吸っているらしく、ふーっという音が電話口に聴

こえた。

「フリーのルポライターを連れて行くけどいがんべ」

傍で聞耳を発っている志田に目で合図した。

「充子さんのオトコかい。あたしが目利きしてあげるわ。つふふふ」

含み笑いをした。途端に興味を抱いたようだ。

踏み敷かれた落ち葉が、水や粘土と一体化して泥壁のようになった細道をくねくねと進み、切り立った崖の上に出ると、そこからブナと楓の根が張り出す道に変わった。

山のどこかから樵の木を切る冴えた音がする。雑木のな

い原始の森を、澄み切った空気を運んで風が渡って来た。樹木に着いている水滴が風に包まれて、樹陰をバツクにばらばらと落ちてくる様子は、真珠のようだ。

人か獣か定かでない声が、廃墟のような堂の門内から聴こえる。建物の屋根の間から青白い煙が上っていた。開け放たれた玄関で、

「警、おいらだよ。お邪魔しまーす」

中へ声をかけると勝手の知った家上がった。彼女は、雨風で筋だけ残す板の間に座って念仏を唱えていた。

黒髪を細くくびれた腰まで垂らし、素足だ。ぼろぎれを纏っている。

志田と並んで座り唱えが終わるのを待った。彼女がゆっくりと振り向いた。一瞬、見間違えるほど気高い貌だ。

怪訝そうな目で、

「それで、あたしに、今日は何をお聞きになりたいの。なんで急に、派遣会社をやめて不來方に帰ったかってこと。それとも……」

途中まで言い、止めた。

「まんずさ。べっこぼつこだども、御焼きを買ってきたがら、受け取ってけるじゃ」

ずた袋から紙袋を取り出して彼女のひざ元へ置いた。

「うふふ。相変わらず、ずーずー弁なのね」  
えくぼを見せた。

「この男性が、充子さんの彼氏なの」

たい焼きを頬張りながら直截に尋ねた。

「だーれ、こんな鼠男は、なんぼなんでもやんたじゃ。うへ、へへへへ」

笑い声と一緒に焼きの薄皮が飛んだ。

「鼠とは、いくらなんでも言い過ぎでしょ」

警は、掌で抑えた口の奥でくくく喉を鳴らしている。

志田は、無然としたままメモだけ取っている。

頃合いを見て、河島の指示で伺った旨を述べたあと、青沢修一郎から受けた性被害の実態を説明して、この件で警が何か知っているのかを尋ねた。

彼女は一瞬、目を見開き、

半月前に、被告の三者から反論文書が届けられた。

河島と相談した上で反論に対する準備書面を作成し、不來方簡易裁判所を通じて被告の三者へ送った。相手方は、三者合わせて五名の弁護士を被告の代理人として立ててきた。高杉警から聞き出した事実と、新たに入手したJCC工機の元同僚と派遣仲間から入手した情報、河島が独自に調査して得た情報を駆使した。

被告青沢修一郎に対しては、

被告が使用していたのは、豊沢スカイウォークの横浜

ナンバーで、最近分かったことだが、この車は人材派遣会社(株)フロートが所有するものだった。

乗用車には、室内外撮影用のカメラとカー・ナビゲーションが搭載されていた。被告は、このカメラを使って原告の写真を無断で撮影し、すでに不來方へ帰っている高杉警へ撮った写真(実物を添付)を送りつけて、高杉警を原告から遠ざけようとした。

被告は、高杉警が背中に刺青を施していることを、不來方の岩鷲リサイクル業者から入手して、それを理由にJCC工機をむりやり解雇させた。(メールの画像添付)

被告は、JCC工機の自動車組み立て現場の係長からファックスで上がって来た派遣社員の解雇リスト(見本を添

「河島五郎さんは、苦界に沈んだ女たちの救世主ですってね。闇の男達からは憎しみを買っている、父から聞いたわ。知っているでしょ」  
と意外なことを答えた。  
「えっ。何のこと」  
咄嗟には返事が出来ない。  
「ご存じなくてもいいわ。青沢修一郎の野郎め、許せない男だぜ。この際は、充子さんのために全部喋ってやるつか」  
突然、べらんめえな口調となった。  
「そ、それはいつたいどういう事ですがすべ」  
身乗り出した。  
「それはね……」  
と切り出して、彼女が、俄かには信じがたいことを話した。聞いているうちに、寒気のするような、おぞましい中身であった。

聞き終えて山道を下りると、辺りは真っ暗になっていた。その足で、河島邸に向かった。車を運転しながら志田浩一は、後をつけてくる乗用車に気付いた。

訴状を提出して二か月後の、第一回目の法廷が開かれる



付)の載った印刷物を見せながら、  
「こつやつて毎月一〇人くらい、仕事のミスしたやつらの名簿が上がって来るんだ。人間の肩みたいな解雇の対象者だぞー」

「でも最後に決めるのはオレなんだ。お前の名前が上がって来ても大丈夫だから心配するなよー」

「オレは、女との約束はからさー」

と言った。原告は被告の言う通りにしないと、首が危ないと恐怖を感じた。

被告は、自分の気に入った衣服を購入してきて、

「これを身に着けてくれ。外国人のような女になれ」

などと言った。(実物を添付。青沢氏のDNA付着)

被告は、原告に対し外国人のヌード写真を携帯電話のメールで送りつけて来て、

「お前のを見せる」

とコメントした。(実物を添付)

被告は自分の住所(本当は温河町の元町だった)を偽り、拳句の果ては手紙の送り先を(株)フロートに指定した。

以上のように、被告青沢は原告を性の道具としてしか見ていないし、派遣社員を侮辱し差別してはばからない非情な人間である。

と準備書面を提出した。

J C工機に対しては、

イージーボイス制度があることは承知している。相談窓口に女性を配置して置くべきだった。

原告がJ C工機に電話でセクハラの被害を訴えた際、電話口に出たHさんは、青沢修一郎氏と親しい関係にあった。友人が横浜のJ Cスタジアムで開かれたイベントの帰途、横浜市内のラブホテルから腕を組んで出てきた二人の姿を目撃している。

前述の総務部所属Hさんは、原告の訴えを上司へ正確に報告せず、これを放置した。一方で、青沢修一郎に対しては直ぐに連絡を取ったものと推定される。

と記し、微笑スタッフに対しては、

被告青沢修一郎氏が事実を認めるか否かにかかわらず、原告が課長に相談した時点で真摯に対応しなかった責任を取るべきだ。

と準備書面を提出した。

先生は、裁判で市川充子に有利な証言をしてくれる高杉馨の身へ、相手方からの危険が及ぶ可能性が大きいとみて、「馨さんを店から連れ出してくれないか。すぐ帰ってくる

ように見せかけて、持つのはハンドバックくらいでいい。

お茶を飲むふりで

指示した。

新聞配達で出かける前の午後九時に、クラブ・クイーンへ行き、受付のボーイへ、

「おいらは馨のこれなんだよ。ちょっとばっかし貸してくれい」

小指を立てた。

「みたことのない野郎だな。女が男か顔が分からない。帽子を脱いでみる」

傍に立っていた上司が顎をしゃくった。

「おかつぱだけ。そばかすだらけの美女です」

毛糸の帽子を突き返してきた。おいらは、類に絵具で点を付けている。

「うへへへへへ。すぐ返しますだ。彼女ば、べっこぱっこ呼んでけるじゃ」

こいつら、おいらを馬鹿にしゃがってと、かっとなったが我慢した。馨が、レオタード一枚の上に派手な毛皮のコートを羽織って出てくると、

「あらあら、瞬間湯沸かし器だわ」

おいらのニツクネームを呼んだ。

「ちえつ。調子に乗っているわい」

グランドホテルネックスへの道すがら、

「これから大阪に逃げるんだ。河島先生が手配したワゴン車に乗ってくれい」

囁いた。

「えっ」

眼を瞠った。

「詳しいわけは聞かん方がいい。先生から話す。身に危険が迫っているらしい」

ホテルの前にワゴン車が停車していて、二人が近づくと、中からドアが開けられた。馨が送られた先は、河島五郎と深い縁のあるNPO法人「女の隠れ寺」であった。

裁判所での判決が下った八か月後の五月下旬に、高杉馨が大阪から不來方へ戻った。この間に、青沢修一郎は失職し、(株)フロートは会社を閉じた。青沢の代理人弁護士は、文書偽造の疑いで所属事務所を解雇された。

河島五郎は、午前六時半に庭に出て金環食が始まるのを待った。九百年に一度といわれる天体ショーは、黒岩山の東に陽が昇るとともに進行し、最初は米粒のような形で太陽の左上を侵し、次第に半月となって陽を蝕み、陽の弧が

上辺へ傾き、左上へと移って行った。

金環食は、午前七時四十分に最大に達し、太陽の九割方が月の影に喰われた。蝕が進むにつれて陽の周囲が金色の環になって空は鉛色に染まり、陽を浴びた庭のナナカマドの葉影が細い草の葉のように揺れ、平たい庭石が丸みを帯びて浮き上がり、隣家の門と自分の影が中ほどで細くくびれた。特殊なグラスを通して異次元のシヨを見たいか酔ったような気分となり東屋で小憩していると、門の外をさっと動く音がした。何か不吉な感じであった。扉を開けて路地に出ると、横浜ナンバーの車が遠ざかっていった。後部座席に犬の頭部が見えた。

「もしかして！」

と気になり、ガレージから大型オートバイを出した。ライダースーツで身を固め、

「至急、市川さんと志田君へ電話を入れてくれ。私は、これから蝦夷森へ向かうから」

妻へ頼んだ。

森へ上る麓にオートバイを置いてサングラスを外し、「空の城」に向かった。横浜ナンバーのライトバンが人造湖の駐車場に停まっていた。窓から車中を覗くと、犬入れ用の檻があった。皮の手袋の上に鉄菱のついたサックを嵌

め、顔を眼だけ残すステンレス入りの薄い布で覆い、ヌンチャクを手に掴んだ。腰には催涙スプレーと電気ショック棒を差した。

金環食が終わった森は静寂で、樹木の葉が酔ってもいるかのように生氣が無い。山吹とツツジが楓の木の下で鮮やかな色を放出していた。枯葉を踏む音が山の陰から聴こえた瞬間に、二頭のドーベルマンが斜面を下ってきた。

最初の二頭の鼻を拳で叩いた。二頭目が脚の脛にくらいついて来た。牙がライダースーツの皮を通して皮膚に達した。ヌンチャクで胴を殴り、催涙スプレーを顔へ吹き付けたが、口を離さない。電気ショックの棒を首に当てた。息を吹きかえした一頭目が目の前に迫った。

「あ、やられる」

と観念したとき、口笛が鳴った。口笛のする方へ視線を送ると、山の尾根に男の姿が見えた。デパートのレストラノコートで市川充子の相談を聞いていたとき、風除室に入ってきた黒縁眼鏡の男だった。ドーベルマンが引き返した。

「先生、大丈夫だべがよー」

市川充子が手に棒切れを掴んで斜面を登って来た。志田が息を切らし、髻が冷静な表情でその後ろへついている。

束だぞ。こつ見えても、こつちはよろず相談で忙しいんだ」

鳥たちが一斉に囀り、澄んだ風が林を通り過ぎた。

「脛をやられた。相手を追うのが先決だ。早く行け」

顎をしゃくった。

「へへへへー。あいつは逃げられないですよ。ほれ、ホイールを外して、ボルトを緩めて置きました。東署の刑事部長さんも、おっつけ来るがら心配ないですよー」

市川は、さも可笑しそうに腹を抱えている。

「犯人の車だとは限らないぞ。無関係だったら、しょっぴかれる」

「あいつはね。青沢修一郎の息子ですよ。勤めたばかりのＪＣ工機を首にされたらしい。髻が仲間の手助けで調べて来たんだってさ。な」

髻が頷いた。

「父も、手伝ってくれたんですよ。悪党どもになんか、河島先生に指一般触らせないわ」

彼女は、手にサバイバル用のナイフを掴んでいた。

「はやく教えてくれればいいものを」

「若い振りしないでさ。年寄りはやさ、それらしくするんだじゃ。絵でも描いてさ。おいらにしんぺーかけるなよ」

「ああ、良かったわー。嬉しい」

女たちは、頬の涙を掌で拭っている。

「もう私のところには、相談事を持ち込まないでくれ。約